

特集 戦う後継者

父が遺した子への布石

事業を引き継ぎ、経験したことのない困難に直面した。目標として強く意識せざるを得ないのが先代の存在。事業方針を巡っての葛藤もあった。しかし、必死に先代を学ぶことによって培われてきた人間力が、今、経営者としての花を開かせた。三名の後継者の取材にみる成長の軌跡を追った――。

取材・文／山口雅之

CASE 1

株式会社コバック
代表取締役 小林憲司



会社概要

創業1959年 事業内容／自動車整備事業、フランチャイズ事業、钣金塗装事業、外食事業 従業員数 310名（パート・アルバイト含む） 本社所在地 愛知県豊田市 資本金1000万円 ホームページ <http://www.kobac.co.jp>

父という壁が私を 経営者に育ててくれた

社員五名の父の会社に入社。父との葛藤のなかで、父に感謝しない人生はすべての誤りを生み出すことを学んだ

作業服を油まみれにして
働く父の姿は
頼もしく、誇らしくもあった

コバックの小林憲司社長が二〇歳で入社した父の会社は、社員五名、年

商九〇〇〇万円ほどの、どこにでもある街の自動車整備工場にすぎなかった。その整備工場は現在、全国に四九四を超える店舗を展開する業界最大規模の車検チェーンとなっている。年商約三九億円、正社員の数は

一〇〇名近い。「すべては父のおかげです」

小林氏に成功の要因を尋ねると、間髪をいれずこう返ってきた。経験豊富で商才に長けた先代と、その先代の指導で力をつけた二代目の父子鷹。そういう画が頭に浮かぶ。

ところが、経営現場における父子の関係は、最初から決して良好ではなかった。

「私が新しいことをやろうとすると、『お前はバカか』余計なことをするな」と怒鳴られる。社員や加盟店の前で私が発表した経営方針を、直後に『俺は認めていない』と父に覆された

こともありました。父をどう説得するかが私の最大の経営課題だったので。でも、今、父に対しては感謝の気持ちしかありません。時間はかかりましたが、やっと気づいたのです」

小林氏の父・正二氏が母・利子さんと二人で小林モーターズを旗揚げしたのは一九五九（昭和34）年、二四歳のときだ。その四年後に小林氏が誕生する。一九六〇年代後半になると、国産大衆車の普及や高速道路の拡張などで、日本にもモーターゼーションの波が一気に押し寄せてきた。今と違って当時の車は故障も多く、整備工場は大盛況、小林モーターズは順調に業績